

土 淨



八月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便認可
昭和二十一年四月二十八日逓信省特許
昭和三十一年八月一日發行
昭和三十一年七月二十五日印刷

第二十二卷

第八號

選舉と佛教

參議院の選舉があつた。選舉前の豫想では暴力國會のえいきようで社會黨の不利と見られて居り、保守黨や保守系の良識を看板にする候補者達に極めて有利と考へられて居た。特に佛教各宗を基盤とした僧侶の立候補者には極めて有力と見られて居たのである。

選舉の結果は、しかし意外に全く逆であつた。社會黨を有利にしたものは、選舉戰中に最高潮に達した沖縄問題が、親米的で再軍備を主張する保守黨への反感となつたためであるとせられ特にアメリカが優秀な武器を日本へ渡すと言つたことも政府與黨にかえつて不利な材料になつたからだと言はれる。此も一應の見解である。然し私共に考へさせられるのは、暴力國會の背影をなしたと噂された日本教員組合の組織力が暴力議員の大半をふくむ候補者を當選させて居る（毎日）ことである。かつての保守反動の全盛期に暴力ニユースが暴力議員の賣名となつたような時代の再現とも見られ、良識ある筈の日教組が新院外團的存在になりはしないかと案ぜられる。特に「先生の運動に弱い親」（毎日座談會）をねらつたとすれば寔に惡質の暴力である。

佛教の宗門を背景とした候補者が男女數名あつたが、地方區では佐藤（大阪大谷派）中野（兵庫南禪寺）草葉（愛知大谷派）があつたが、全國區では東本願寺の大谷蓮枝が一人だけ當選して他は大宗門である曹洞宗や西本願寺等の力も空しく落選となり此様な政治面には既成宗團の組織が無力であることを感ぜしめた。天理教は中山眞柱の意見に基づいて教職者の立候補を見合せたので、中心社の常岡氏一人が立候補當選したが、此の教派は次の創價學會以上に組織の力が強いと考へられ、今回でも若し數名の候補を立つるも此を優に當選せしめ得たと思はれる。

日蓮正宗の創價學會は所謂新興宗教としては大宗教の部類には入らないと見るべきであるが、六人の候補者を立て、三人の當選をなしとげて居る。又去年の四月の地方選舉では、此の會は五十三名の立候補をして五十二人の當選を見て居る（朝日）と言はれる。職業野球の元東急フライヤーズの人氣投手であつた白木君も、野球とは縁遠い創價學會大阪支部長として、信者の投票で、あのはげしい大阪地方區で當選して居るのである。今次の選舉の全國の違犯の八割は創價學會（朝日）であるとされる。投票の行はるる相當前から全國的に創價學會の違犯が摘發を受けて居たのであるが、學會では此を法難であり且つ折伏傳導の場と考へたらしく、學會内に選舉妨害對策本部が設けられ、又警察官等の取調べに對しては「あなたには不幸が起る。調べを止めて信心することだ」と言つた（朝日）とせられる。全國違犯の八割方をたつた六人の立候補の會が一手で犯すと言ふに至つてはほとんど法律や秩序を無視したものと言はざるを得ない。

「先生の運動に弱い親も」悪いが、前宗教的な恐迫觀念に踊る國民の宗教觀念の低劣さも重大な問題として考へねばならない。知性の宗教と言はれる佛教の寺院が全國に散在する下で、此の様なことの起るのを私共は自らの責として反省せねばなるまい。（七・一二）（佐藤密雄）

法然上人に對する日蓮聖人の態度

須藤 隆 仙

日蓮聖人には多くの著書がありますが、その中で、法然上人に關して色々と言及しているところが澤山あります。それ等の中から、日蓮聖人が法然上人をどのようなに見ていたかというのを要約してみますと次の三點を上げることができるようです。

一、法然上人は日蓮よりも幼稚である。

二、法然上人は衆生を迷わした。

三、法然上人は法華經を捨閉闍しやへい拋ほうしたので（なげうつたり、捨てたりしたので）地獄におちる。

第一の法然上人を日蓮聖人より幼稚だとする見方、これは立正安國論や南條兵衛七郎殿御書といったようなものに良く表れております。

立正安國論の中では「法然は曇鸞・道綽・善導といった人達の流れをくんでいるが、既にこれ等の人達に間違いがあるものであつて、法然は流れをくんだという丈で、その源を知つてはいないのだ」とか、「法然は正しい法をあなたなどつて平氣でいる」とか、盛んに法然上人を非難してあります。

す。又南條殿御書には「法然や善導等が書いている法門などは日蓮十七八の頃既に知つていた」と書いてあります。この南條殿御書の言葉は大變面白い言葉で、私は日蓮聖人が色々と言然上人のことを口を極めて罵倒している、その本當の奥底は實はこれであつたのだという、その原因が解つたような氣が致しました。

その原文を記しますと「法然・善導等が書き置きて候ほどの法門は、日蓮は十七八の時より知りて候ひき」というのでありますが、これこそ實によき日蓮聖人の意中を表明したものであると思います。

即ち日蓮聖人は法然や善導の所説など十七八の若僧の時知つていたというのであつて、早い話が、お前等のいうことなど幼稚だ、ということでもあります。

ですから立正安國論の場合でも法然の説は佛教の正しい教えを無視して、自分勝手の曲説を述べたものに外ならなと斷じ、忘語惡口の科、言うに比なく、責めるに餘なしといつてあります。

日蓮聖人が法然上人を罵倒する場合、随分と思切つた言葉を用いておりますが、これは多分、先の御書にもあつたように、頭から法然の考えなどは幼稚なものだ、という先入感があつたからでしょう。

ですからこの日蓮聖人の先入感を以つてみれば、その一々の言葉の裏が知れてくるのであつて、理論的なものが非常に薄くて、唯感情的に激昂しているということ強く感じさせられるのであります。

第二に法然上人は衆生を迷わしたという、これはいたる所にいつている言葉であつて、日蓮の法然觀の一番中主たる問題のようであります。

立正安國論に淨土宗を論ずる第一番の言葉として「後鳥羽院の時、法然というものが選擇集という書を作り、一代の聖教を破つて、十方の衆生を迷わした」と記しております。

ただこゝで極めて問題であるのは日蓮聖人が法然上人による淨土念佛の教えの非常なる流布を大變に驚いているという事實であります。立正安國論には「上は國王から下は土民に至る迄、經といへば淨土の三部經よりなく、佛といへば彌陀三尊よりない」と述べ又、「彌陀の堂以外には供養を止め、念佛の僧でなければ施しもしない」と嘆き、爲に念佛宗以外の佛堂は壊れ、聖僧の姿も見えなくなつてしまつた、これ皆、法然の選擇集の爲であるといつております。大體日蓮聖人の文章は非常に文學的で、表現も時には非常に誇大的なものを用いておりますが、しかしこの表現もその誇大性を見落すことはできないとしても、實際に日蓮聖人が念佛の流布に驚いたのは事實であつて、聖人のこ

れ等の言葉から當時の念佛信仰の隆盛を充分に知ることが出来ます。

この外日蓮聖人は撰時鈔にも「日本國中皆一同に法然の弟子と見え、此處五十年が間一天四海皆法然の弟子となつた」とか、災難對治鈔御遺文には「日本國中上下萬民皆法然上人を信じて選擇集をもてあそんでいる」とか、實に大袈裟なる表現を用いて法然上人の念佛の流布の恐しさを訴えております。

このように念佛信仰の隆盛に驚いたればこそ益々法然は衆生を迷わしていると騒ぎたてたのでありましょう。

第三は法然は法華經を捨閉闍抛したから地獄におちる、というのでありますが、捨閉闍抛とは、文字通り捨はする、閉はとじる、闍はさしおく、抛はなげうつ、で、法然上人は法華經を捨てたりなげうつたりしたというのであります。

この口吻も日蓮聖人が法然上人を論ずる場合の常用語で先の法然上人が衆生を迷わしたとする見方の一番根本の理由となつてゐるものであります。

法然上人が法華經を捨閉闍抛したというのとは一體どういうことかというに、法然上人が選擇集の中に雜を捨てるとか、定散の門を閉ずるとか、聖道門をさしおくとか、雜行を抛つとか、いうことを書いてゐるからであります。そしてこのことは立正安國論はもとより、聖愚問答鈔、佐渡御書、撰時鈔、曾谷鈔、下山鈔、諫曉八幡鈔といつた多くの著書に書き立てております。

日蓮聖人はこれ丈では氣がすまず、更に法然上人は地獄におちると極言しております。その理由は法華經を捨閉闍

抛したので、無量壽經の中に「正しい法をあなたどつた者は救われない」とある文や、法華經の中に「この經をあなたどつた者は地獄におちる」の文によつて地獄に落されるのだというのであります。更に法門可被申様之事という文には法然上人等の念佛者に供養した者迄地獄におちると説いております。

こゝで極めて注目すべきは、實はどう公平に見ても感情的に法然上人を罵倒しているのとより見えないのではあります。すが、日蓮聖人自身は「これは個人的感情からではなく、大きな法の立場から批判しているのだといつてゐることであります。

聖愚問答鈔という書の中に次のように書いております。聖愚問答とは聖人と愚人の間答であります。聖人は勿論日蓮聖人で、先づ愚人の問いとして、

「お前のいつてゐることは悟つてゐるのか迷つてゐるのか解らない。

いやしくも善導和尚は彌陀の化身、或は勢至の化身といわれ、法然上人又同じである。善導の後身と迄いわれてゐるのではないか。上古の先達であるばかりでなく、行徳も勝れ、智慧も高い高僧である。何で地獄におちるようなことがあろうか」

これに對して聖人の答は次の通りであります。

「お前のいうことは本當である。自分もそのように信じたいのである。だが佛法は人によつて云云されるものではない。唯經文によつて論すべきである。身の貴賤を問題にして、その人の説く法迄を輕視してはいけない。

お釋迦様の遺言涅槃經には法によつて、人によるなとあ

るではないか」

即ち、法に依つて、人に依らざる、という立場から論じてゐるのだというのであります。更に同書には「自分が正しい教えを出して、善導や法然の地獄の苦しみも救われるであらう」ともいつております。

こゝでは盛んに法然上人に對する罵言が法の立場からである事を強調してゐるのであります。が、しかしどう見ても先の法然上人を自分（日蓮）より幼稚だとする見方が裏に存在してゐることは否めません。開目鈔という書の中には「法然いたわしいとも思わないで」といつたような言葉さへ使つております。

だがこのような反面には法然上人の人格の立派なることを内心は認めていたような節も窺えます。

先の問答の中にも愚人が法然上人を善導大師の後身、進んでは彌陀の應化、勢至の化身といつたのに對して、「お前のいうことは本當だ」といつております。原文をそのまま記しますと、

「汝が言然也。余も仰いで信を取ること此の如し」といつております。

こゝでは法然上人を見る日蓮聖人の複雑な心中が察せられるような氣が致します。

どうやら日蓮聖人は、「獅子身中の虫は佛弟子源空である」（守護國家論）と迄極言してありますが、その眞意は、實は法然上人の偉大さを認めていながら、それでも一つの先入感を捨てきれずに、侮慢的態度をとつて、法然上人を詐欺漢視し、しかもそれが法の立場からであると辨解して自家撞着してゐたというのが真相のようであります。

ゆうれいの出るわけ



常 信 中 竹

「こんぱくこの土にとどまつて、などで、このうらみを
はらさづ、おくべきや——」

ドロドロドロ、と、夏の夜景に、涼味をそえる「幽霊
の季節」今や、まさにさかりである。ここにゆうれいので
て来る「わけ」をみてみよう。

ゆうれいというと、その代表はお岩さん、皿屋敷のお菊
男では木幡小平等々、わが國には、まことにゆうれいの數
が多く、石川先生の筆法をかりれば「濱の眞砂はつくると
も……世に、ゆうれいのたねはつきまじ」である。西洋で
は、まづまづ「ハムレット」に出て来るくらいが關の山。
日本ではどおしてこんな多いのか知ら。まづ、問題はこ
こにはじまるのである。

つい昨年も、銀座のビル街にゆうれいが出て、新聞を賑
わしたばかりであり、ゆうれいは二十世紀の今日、東京の
どまん中にもいるのである。決して、冗談でなしに、現代
の日本人の中には、ゆうれいの存在を信じている人が随分
多い。なるほど、芝居に出て来るお岩さんのような、髪を
ふりみだして、兩手を胸の前にダラリとさげて「うらめし
い」と出て来る、足のないゆうれいを、そのままに信じて
いる人は餘りない。文部省の迷信調査會でしらべたところ
では、六千三百餘名の人の中で、ゆうれいがいると答えた
ものは、一三〇人で二・〇四パーセントだつたとのことだ
がある。百人中の二人では、日本の人口八千萬人のうちでは

百六十萬餘の人が、今日でも、うれしいがいると信じていることになる。しかし、足のないうれしい以外のうれしいを信じている人は、はるかに多い。ならばこの足のあるうれしいとは何か。ここに問題の第二がある。

×

問題の第一は、何故、日本にはうれしいが多いのかという事。

問題の第二は、足のないうれしい以外のうれしいとは何かということ。

この二つについて考えてみよう。

×

先日（七月下旬）の日曜の宗教放送の時間に、圓覺寺管長、朝比奈老師のお話があつた。その中の一節に、人間には、どんな人にも佛性というものがある。いや人間ばかりでなしに、山も川も草も木も、佛のまなこでみるならばすべて佛性（佛になれる性質）をもっている。ただ、それに氣がつかぬばかりに、毎日、あくせくとして、人と争つたり、人を押しつけたりして、おのれの我を張るのに一生けんめいになつてゐる。實に、あわれなものである。こうして、人間には、尊い佛の種がやどされている。その人間が死んでから、人に恨みを抱いたり、たたつたりするといふことは、實に馬鹿げたことである。たたつたり、とりついたりするようなものは、佛の種を持たない、人間の形

はしているが實は人間でも何でも無いものだ。きつと、きつねかたぬきなのだろうかといわれていた。まことに味合ふべき言葉である。

そもそも、うれしいが出て来るのは、死んでも死にきれずに、この世に思いが残つてゐるからであるが、そうならば、うれしいは結局死んだんではなくて、死にきれない人間がまよつてゐることになる。だから、うれいを出なくするには、その「思い」またわ「執念」をとりのぞけばよい。お經を上げたり、供養をしたりすると出なくなるというのも、そのためである。それなら、この「思い」とか「執念」とかといつたものが、本當にあるのだろうか。

近頃、さかんに流行する新興宗教のきめ手が、これである。「因縁」という言葉でこれを説明している。病氣を患ふ。仲々なおらない。お祈りをしてみて貰うと、先祖の因縁のむくいだという。或は先祖の靈がたたつてゐるからだという。そこで、今度は改めて、その因縁を断ち切つて貰うために、回向料を奉納して祈禱をしてもらう。因縁につて、先祖の思いが、子孫の誰かに移つて、病氣にしたり貧亡にしたり、不幸にしたりするのだという。天理教などで、さかんにいう「因縁ほこりを拂う」というわけで、踊つたり、祈つたりすれば、この「思い」——因縁が切れるという。……だが、ちよつと待つて下さい。なるほど黙つてきいてゐるといかにもありそうなことであり、もつとも

らしくきこえる。しかし、この理窟には、その最初に、大きな「わな」がある。それは、思いとか執念とかが、當然あることにしているが、これが問題である。朝比奈老師のいわれるように、先祖として、どうして自分の子孫が可愛くないものはない。それが、なんで、たたつたり、とりついたりするのか。ことに、人間はそれぞれ、みんな尊い佛性を持つていきている。死ねば「佛になる」といわれて、この佛性が輝き出すのだから、先祖なるもの、いつまで、煩惱具足の凡夫のように、子孫をうらみうらんで、たたリなどするものか。因縁々々というけれども、何か悪いことがあつた時だけ「ほれ因縁だ」とかつぎ出して、日々の生活に、安穩に、楽しくすごさして頂いている、よい方の「因縁」については、何もいわないのはどおしたわけだろう。本當の佛教でいう「因縁」とは、そんな、片手おちの、えこひいきのあるものではない。すべての事象、出来事が、すべて佛のはからいによる、大きな因果の流れによつて流れ動いて行くのであつて、特定の時に、特定の人間だけに突然にふりかかつてくるものではないはずである。

×

どおして、こんな簡単な理窟がわからないで、ちよいと何かあると、すぐに、新興宗教の門をたたいて、あやまつた信心に入るのだろう。それは、日本人の大部分が、まだ足のあるゆうれい（たたり、因縁）を信じているからであ

る。芝居に出て来るゆうれいは信じなくても、先祖のおもいを信じているのである。

何故、日本人は、こんな馬鹿げた、片よつたことを信ずるのか。これには、なかなか深いわけのあることであるが、ここには、簡単にいつてみると、それは、日本人がずっと昔、むろん、佛教が日本に入つて来る以前から信じて来た「死靈」の觀念によるものなのである。死靈というのは死んだ人の靈魂のことである。大昔の人は、人が死んでも、それがよくわからずに、肉體とは別に、何か、生きつづけているものがあるのだろうと想像した。そして、人は死んで、肉體はほろびるが、魂は残つて、そこらをウロウロしているのであろう考えて、この目にみえぬ魂を、おこらしたりしないように、色々の食物などを、墓所に供えたり、お祈りをしたりした。今でも、お葬式の行列が、お寺の庭でぐるぐるまわつたり、行きとかえりとちがつた道を通つたりするのは、死んだ者の靈魂、すなわち死靈があとをついて、また歸つて來られないようにするためである。こうして、日本人は、昔から死靈というものの存在を、かく信ずる風習があつた。今日でも、ことに東北の町々には「めくらみこ」がいて、求めに應じて、死者の靈を呼び出して、色々の因縁を語つたり、ことうらないをしたりしているが、これなど、太古の死靈觀念が、なおいきている證據である。こうして、死靈というものは、死んでからも

この世に何かのつながりを持つて、時に應じて出て来るもので、いわば、死人と生きているものとの中間といった形である。だから、何か、えたいのしれぬ出来事、不測の災害など、表面上説明のつかないことは、すべてこうした死霊の仕業として、お祭りしたり、供養したりする。法然上人在世頃の、京の町には、色々と不思議なことが在った。羅生門に鬼が出るとか、疫病がはやるとか、慧星があらわれるとか、夜中に、宮中の建物が家鳴り震動したとか、色々の怪奇がおこつた。當時の人は、これは源平の争いの間に死んだ、多くの怨霊おんりょうの仕業として、宮中でも、「御霊會」(ごりようえ)といつて、怨霊をなくさめる法會をひらいている。

怨霊というのは、死霊のなかでも、とくに生きている間不遇だつたり、悲惨な死にかたをしたりして、恨みを抱いて死んだものの霊で、従つて、生きている人間に何とか仕かえしをしようと、ねらつてゐるものと考えられた。何のことはない、生きた人間と、死んだ人間とは、今の世界の兩陣營のように、對立して、いがみ合つてゐるようなものである。死んだのちまで、此世の争いがつづいたのでは、さぞかし、死んだ人々も浮ばれぬことであらう。ほかのことでは、非常に文化的で、洗練された文化人の胸の中に、案外、こんな、古い時代の迷信がいまだにのこつていて、時折り顔を出すのである。

x

日本人がゆうれい好きなのは、こうした、古い古い時代の迷信を、根深く持つてゐるからで、何か、ちよつと不思議なことがあると、すぐに、死んだものの「たたり」だとか、「因縁」だとしてしまうのである。

こうした、日本人の宗教的非常識を、たくみにとらえて利用しているのが、新興宗教であり、その中でも、近來やかましい、日蓮正宗(創價學會)に、いちぢるしい。たたりやばつが、佛様のことから、飛躍して、選舉の際の投票にまで悪用されたのでは、これはもう宗教どころか、ちよつとのことに因縁つけて、ゆすりたかりをする暴力團にも等しいものである。こうなつては、佛敎のブの字も彼等に與えることは出来ない。

x

ゆうれいは、夏の景物として、納涼大會のおなぐさみは結構であるが、正面きつて、白晝出て來られたのでは、何ともあいさつの仕ようもなくなつてしまう。

「たたり」などは、絶対にない。それは何千年か昔の人々の、無知な理窟でしかない。また、因縁というものも、新興宗教でいうような、えこひいきのある。悪いことばかりをいう因縁ばなしなど、それこそ、「おしやかさまでも御存知ない」ものである。

(大正大學敎授)

大文字



教 隨 本 藤

京の夏は何んと申しても四條河原の夕涼であろう。そして天明期の蕪村の句を見るように、

大文字や近江の空もたゞならぬ

と夏の夜を彩る名物大文字の行事のほどが窺いとれるのである。今日では大文字梵火の行事は舊暦八月十六日の夜の盂蘭盆の送り火、厄病除けとして關西方面の有名な特殊行事となつてゐるが、この大文字の大の字面の縁起の信仰や行事起源等によつて起きた傳統を以つて、山房の僧衆の助法により山膚に建設された大仕掛の大模様を梵火される大儀式莊嚴の行事がそれぞれの威儀作法に據り修行されてゆく誠に下界では想像もつかぬ大掛りのものであつて、一般に見る仕掛花火態の仕掛け物でわないのである。この一大宗教行事が修行される所は、

布團きたねたる姿や東山

と巖谷小波がうたへる、あの東山峰巒に續く如意嶽で、二條のお城に面して宗教行事として點されるものではあるが外觀的には、京の四季觀光隨一のもので、京を表現するあらゆる物の背景とされる程の誠に美觀なものであり、恰も單に季節的行事として似かよう、關東の夕涼の雄たる錦繪に見る隅田川にかゝるあの扇形した兩國橋の夜空に、五彩とあや織る川開の花火を想うとき、元祿の江戸の其角は斯う見立てゝゐる。

小屋涼し花火の筒のわるゝ音

扇的花火たてたる扈從哉

この人數船なればこそすゞみかな

この兩者は共に危病除けと暑氣拂いに、その源を發するものであるが、ともかくも川と河原の納涼風趣が相違するところに、今昔を通じてその特長がある。そして寶曆頃の祭りからこの方の納涼を見ると、京なればこそ河原の夕涼の妙が、全く關東にないみやびな風情に接するものがあると言へよう。

川風やろすぎぬ着たる夕涼

と涼風一味すでに夏無しと、四條橋は加茂川の清淺を流して、東は祇園の花街に接して、西は先斗町にせばまるところ京の風流依然として晩涼を呼ぶところである。

この夕涼に併せて大きな興を添へるものは一つに、この如意峰の大文字である。この大文字のお盆の行事が始まる頃ともなれば、ゆるやかに揺れていた京は手鞠の彈むように、毎年五月の鴨川踊が濟み、川瀬に綾なす千鳥模様の紅提灯の光りが薄れる頃ともなれば、三條大橋を中心に二條の橋の袂から下五條の川下まで、河原へ茶亭の床几は水邊に立連ねて懸けられ、簾ゆかしい雪洞の光は玲瓏として涼しい夜風に媚びるように流れに映じて和す風情は、まこと憎いほどにまで展開されてゆくのである。その萬斛の涼味を汲むべく洛中洛外京百萬の人のいのちは、晝の炎塵の赫氣を洗ふべくこの加茂川のさゝやきに甦るのである。

特に舊盆のこの大文字行事を迎へる宵ともなれば、燈を懸け氈を敷て客を迎へる渚の上に設けられたこの張り出し床の手摺に夜氣を掬つていると、床下の棧橋から「旦那はん、辻買つておくれやす」と青竹に財布をくゞりつけ、辻占賣の上方風の桃割に結つた小娘が、手摺を縫つてゆく。京の六齋踊は唄三味賑やかに流して來る。いづこか尺八の哀音は脈々と流れて消える。その中に床しくも酒汲み交している客筋もあり、白い顔、玉虫色の紅唇、赤い襟とだらの餘情は、この加茂川の夕涼でなくては見られぬ殊更の情緒を深めてゆくのである。

かくする河原の賑かさに、今迄闇に眠つていた川上遙か斜めの如意の山懷から一團の猛火が赫つと煙え上る梵火。その火舌は次第に大模様の雄大な文字面となつてみごとに浮び出で、漆黒の空を紅として了うのである。この紅焰と梵きあがる梵火秘法は、能く一切の障除息災の法水となつて、洛中に美妙の華を咲きひろがせ、百萬の京人をして仰ぎ讃嘆されてゆくかのように一瞬の靜謐に窺へる。この夜三條の橋からは下加茂の森のかなた岩倉山に、妙法の二字が遙か點るのが見えるのである。かくしてうすれゆく大文字の送り火の跡の淡い、年に一度の哀愁と言うようなものが、明け易い夏の夜に漂い消えてゆくのである。

夏期僧堂

八月の下旬、東京、神奈川の寺院徒弟夏期僧堂が、海水浴で賑う海の銀座、鎌倉材木座にある浄土宗の大本山光明寺で開催された。光明寺は衆知の如く三祖記主禪師良忠上人の心血を傾けた吾宗の名刹であり、浄土教関東流布の最初の足跡である。数世紀に亘つて潮風をうけた伽藍は實際の年数より、はるかに星霜を感じさせる。

門の前には海の家看板が数枚ブラ下り、夏蟬の聲にあふれる境内に一步入ると、山内につけてある擴声器からレコードのマンボ、ジャズが壓倒するような音響をひびかせる。ヨシズ張りの茶屋を通つて玄關に入ると、水着一枚の男女がゴロゴロと晝寝の最中。こゝを借りている團體の若人達だ。

開山堂の一間廊下には、敷布團を座布團にした一組がマーデヤンに打興じている。將棋を指している者、雑誌を讀んでいる者、その他のゲームをしている者以外は、殆んど氣持よさそうに眠っている。

その中で開山堂前の蓮池を渡つて聞えてく

る讀經の聲、一定のリズムにのつた子供達の清純なコーラスは、吾々の耳に異様なばかりの感銘をもたらした。

その聲は一日早くきていた神奈川教區の子供達である。

旅装をといて、すぐ食事になる。午後のおスヶジュールを見ると無駄なくつまつていて、子供達の楽しさの半分以上をしめていると思う海水浴は三時から五時迄となつてゐる。

三時になつて、素早く水着に着かえた一團が濱に向つて馳け出していつた。この日は運わるく、臺風の餘波で高潮に洗われは海岸は茶屋の中迄海水に見舞われ、商賣は上つたり。由比ヶ濱方面は、シブキで見えない。

ガッカリして濱邊にたゞずむ一行に土地の人がきて、さも申譯ないといつた顔付きで、危険だから入らないでもらいたいと懇願している。ショゲル子供達をなぐさめて、野球をやつて引揚げた。

夜に入つて、くたびれた子供達を書院に、吾々は開山堂で寝ることゝなつた。

左右の部屋はWとNの大学生の一行が入つており、仲々賑やか。W大はキーパーの命令で十時以後は、他人に迷惑をかけぬ様お互に自しゆくしよう。——といつた箇條書が貼つてある。それでもラジオとマーデヤンの牌の音、話し聲などがやかましい。

翌朝は六時半に起こされ、眠い眼をこすり乍ら洗面を済ませて、衣をつけると、子供の方はもうすつかり用意ができていた。

御法主御導師のもとに、朝の勤行が行われた。本堂下陣には、もう泳いできたものか、水着だけの連中が思い／＼に吾々を珍らしい風景でも見るような眼で見ている。中には信仰心のある者もいて、キチンと正座して合掌している。

こんな珍らしい「おあさじ」は一寸類がない。大體佛前に座る時は、昔から衣服を正し身を清淨にし、心から佛に向つて合掌するものである。それにも拘らずこんな自由な、バラ／＼な群集を見たのは始めてのことだつた。

勤行が終つて、御法主の法話があつた。柔和そのものの御顔には彌陀の慈悲心をそのまゝ受けつがれた感じだ。

元祖上人少年時代の健全な肉體と精神、勢至菩薩の來現を表す様な力強さが子供達の耳底に残つた。

始めボンヤリ聞いていた水着の連中も御法主の御法話に身を入れて聞きだしたのがはつきり判つた。佛教に無縁の人にも結縁をえたのである。朝の太陽に照らされて明るい本堂には、御法話の聲のみがきこえていた。

童 話

た あ ち や ん
と
ヤ ギ

北 村 謙 順

たあちやんは、ことし 五つです。ほんとうの名前は「いまふくたゞし」というのですが、みんな たあちやん と呼びます。

たあちやんは、いつも、バクバクの長靴をはいて遊んでいます。どろ遊びが大好きで、毎日のように、ズボンから顔まで、泥だらけになつて歸つて來ます。時々、バ

來ました。かわいい口をあけて、メエー メエー と、よくないています。

お家の庭で遊んでいた たあちやんは、バク バク と、いそいでととんで來ました。

「やあ、ヤギだ。ヤギだー。」

たあちやん は、大よろこびです。

クバクのながぐつの中まで泥水が入っていることがあります。その時にはズックズックと音がするのですぐ分ります。たあちやんは、バクバクと遊びに出かけて行つてズックズックと鳴らして歸るわけです。お家の近くになつて、お母さんの姿を見たりすると、とんで來ます。すると長靴も早くなります。バツク バツクズックズック バツク バツクズックズック……

ある日の事です。たあちやんのお家へ、ヤギの子が、貰はれて來ました。ヤギは、お父さんに連れられて、綱に引かれ乍ら、やつて

お父さんは、汗をふきながら

「たあちやん かわいいヤギだろう。だいじに 可愛がるんだよ」

「うん」

たあちやんは、こくんと うなずきました。

「たあちやん大丈夫かしら。心配だわ。たあちやんヤギをかまつたりするのじやないの？」

と、家の中から出ておいでになつたお母さんがおつしやると

「そんなことないよ。大じにしてやるよ。なあ ヤギちゃん」

たあちやんがヤギに向つて云うと、ヤギちゃんは ビヨン ビヨン はねまわり乍ら、メエメエ となきました。

たあちやんは、ヤギちゃんが分つて呉れたと思つて得意です。

「ねエ お父ちやん ヤギの名前、何ていうの？」

「ヤギには、なまえなんかないよ」

「だつて、うちのねこ タマつて云うじやないの？」

「なるほど、ねこ には名前がついていて、ヤギにはなまえがないのは おかしいかな。たあちやん、何てつけようかな」

「うーん と えーと」

たあちやんは、しばらく考へていましたが

「あツそうだ。」

「いまふく ヤギ」 だ。」

「なに？ いまふくヤギ？ いまふくヤギかあはゝゝゝ いまふくヤギ は よかつたな。うん これはいゝ名前だ」

お父さんも、お母さんも、思はず大きな聲でお笑いになりました。ヤギもうれしそうにメエー となきました。

たあちやんは、お父さんに、いい名前だとほめられたので得意です。それからというもの たあちやんは、よくヤギちゃんのそばで遊びました。

ところが、たあちやんが、バクバクと長靴をならしてヤギちゃんと遊んでいると、みんなが集つて来て、わざとくきくのです。

「ね、ね、たあちやん！ たあちやんのところのヤギね、なんという名前？」

「うちのやぎ いまふくヤギ」

たあちやんが、すました顔で答えるので

「あはゝゝゝいまふくヤギ か あツはツはゝゝゝあツはツはゝゝゝ」

子供達がみんなで大笑いをするのです。

でも、たあちやんは、みんなが笑えば笑うほど、だんだんヤギがかわいくなつて来るのでした。

ある日、たあちやんは、お母さんから、大すきなおせんべいを頂くと、ヤギを連れて、裏山へバクバクと上つて行きました。そして、ヤギを一本の木につなぎました。ヤギちやんは、草を見ると大よろこびです。メエーメエー となきながら草をおいしそうにたべはじめました。

たあちやんは、しばらくの間、ヤギちやんの様子を見ていましたが、やがてズボンのポケットに、手をつっこみました。ポケットには、先程頂いた おせんべいがあつたのです。

たあちやんは、ヤギが草をたべるのを見ておせんべいの事を思い出したのです。

「ぼくも たべようかな」

たあちやんは、一枚のおせんべいを出すと口の中へ入れようとしたが、急に何を思つたのか、そのおせんべいを半分に割りました。おせんべいは、バリツと音を立てゝわれました。たあちやんは、その半分の、口の中に入れてたべました。そして、残りの半分の、ヤギちやんの方へ、ポーンとほうりました。

「いまふくヤギちやん たべな」

たあちやんは、やさしい聲でいいました。ところが、ヤギちやんは、それには目もくれず 知らん顔です。

「おい ヤギ！」

たあちやんは、少しことばをきつくしました。

「おい！ たべな！」

たあちやんが、あらあらしくどなつても、ヤギちやんは、まだ平氣です。

「おい、こゝだ こゝだよ」

とうとう指でおせんべいをさして教えてやりましたのに、ヤギちやんの方は、向うを向いたまゝです。

「あつ」ヤギちやんは、足でおせんべいをふみづけてしまいました。おせんべいは、どろだらけになつてしまいました。

たあちやんは、ポケットから別のおせんべいをつかみ出すと、いきなり、バクバクツとかけ出してヤギちやんをつかまえました。

ビックリしたのはヤギちやんです。

「メエー、メエー はなしてエー」

と大さわざです。たあちやんは、はなすものかと、つかまえていましたが、ヤギちやんも一生懸命ですから、とうとうはなしてしまいました。ヤギちやんは、

「メエー メエー にげろ」

と、さかんになきながら、そこらあたりを、とびまわります。

たあちやんは、つかまえようとおいかけます。ヤギはつかまえられては大變と、にげまわります。たあちやんがおいかけの度に、長靴が、バクバクと鳴っています。

「コラまでヤギ！ バク バク バク」

「メエ、メエ、メエー」

「コラ までヤギ バクバクバク」

「メエ、メエ、メエー」

「コラまで バク バク メエー メエー メエー」

大變なさわぎです。けれどもヤギちやんは、木にしばられていきますから、それ以上は、にげられません。とうとう つかまつてしまいました。

ヤギちやんの口をあけた たあちやんは、おせんべいを ヤギにたべさせようとします。

ヤギは

「いや いや メエー メエー」

とないています。

「こらヤギ おせんべ たべろ、おいしいんだよ、たべな こらたべなつてば」

「メエー メエー いやだよ メエー メエー いや

だよ」

あまり裏の山で ヤギがなかったので、變だなとお思ひになつたお母さんは、急いでのぼつて来て見ますと、たあちやんが ヤギの口におせんべいを入れている所です。

「たあちやん！ 何しているの！」

お母さんのきつい聲に、たあちやんは思はず ヤギをはなしました。お母さんの顔は、こわい顔でした。

「たあちやん ヤギなんかにおかしをやるものではないありませんよ、ヤギが死んだらどうするんです！」

たあちやんは、しまつた、と思いました。たあちやんは、ヤギもおかしはたべられるのだらうと思つていたからでした。たあちやんは、ヤギにも、たあちやんの大すきなのを、わけてたべさせてやりたかつたのです。

「ほんとうに、しょうのない子だね！」

とお母さんは、おこりながら、ヤギをつれてお家の方へ下つて行きました。たあちやんも仕方ありません、スゴスゴと後からついて行きました。この時だけは、あの長靴の音もしませんでした。

それから間もなくして、このヤギが小屋の中で死んでいるのを、朝早く起きたお父さんが見つけました。よる一人で死んで行つたヤギちやんのことを思うと、たあちやんは何だか すまないような氣持になるのでした。お

父さんは、たあちやんが可愛がつたやぎだからといつて裏のお山へ ヤギちゃんを、うめて下さいました。お母さんは、ヤギちゃんのお墓の前に、お花を上げて下さいました。そして「たあちやんこれをヤギちゃんに上げて頂だいね」といつておせんべいの入つた袋をたあちやんの手に渡して下さいました。たあちやんは、一寸ふしぎに思つたので、お母さんに たすねました。

「お母さん ヤギちゃん おせんべ たべられないんだろ？」

「えゝ、そうね。ヤギちゃん 生きている時はね。でもね、ヤギちゃん 今はね ののさまの所へ行つたんでしょ。もう何でもたべてくれるわね きつと。たあちやんのおせんべが一番おいしいつて」

とお母さんがおつしやいますと、たあちやんは

「そう」

と云つたまゝ、下をむいていました。たあちやんは、お母さんのおつしやつたことがとてもうれしく感じられたからでした。

「いまふくヤギちゃん。何でもたべて呉れる？ たあちやんのものでも、おなかをこわさずに、いやがらずに たべてね」

と じつとお墓のおせんべを見ながらヤギちゃんに向

つて心の中でいいました。それからたあちやんは、お母さんのなさるように手を合はせますと、いまふくヤギちゃんのお墓に向つて頭を下げました。

この様子をさつきから見えておいでになつたお父さんもうしろから一緒になつて拜んで下さいました。

その晩たあちやんは、長靴をバクバクとはいて、いまふくヤギちゃんのところへ遊びに行つた夢を見ました。

ヤギちゃんのところはお花でいっぱいでした。そのお花の中で、ヤギちゃんは、たのしそうに遊んでいました。ヤギちゃんはニコ／＼して、こつちをむいて 首をたてにふつて おいでおいでをしています。たあちやんは、一寸遠慮しましたが、思いきつて、バクバクとお花の中へ入つて行きました。

すると、ヤギちゃんは何かくれました。それは、おせんべいではありませんか。ヤギちゃんは たべたと云つています。たあちやんは、口の中へ、一つ入れるとかんでみました。

バリツと音がしたようです。

するとこれを見て、ヤギちゃんは、ニコリ笑いしました。たあちやんも、思はずおせんべいを口に入れたまゝで、ニコリと笑いました。 (おわり)

讃 白 坊 白

—長崎— 悟 眞 寺

木 津 義 彰

長崎市内の観光バスは最近新路線によつて運行を始めた。従來の観光地のほか新に長崎市稻佐の悟眞寺が加わつたのである。この寺はキリシタン全盛時代ヤソ教徒によつて迫害弾壓されたところ建てられた長崎の佛教復興期における最初のもの。その國際墓地が示す長崎と唐紅毛南蠻の厚い交りの歴史につながる寺でもある。原爆のため破壊され観光客もぼう然とするほどの荒れようだが、いま再建運動が推し進められている。

南蠻船により貿易商人と宣教師が長崎に第一步を印したのが元龜元年、その二つながらと約を結んだ大村純忠はすでに改宗受洗していたが、この年妻子ともに洗禮をうけさせ以後、佛教の僧（そのころは神佛併合）に對して「キリシタン宗門に歸依せよ。改めねば領内より放逐すべし」と命令した。かくて退去した佛僧のあと全町あげて改宗し、天正二年（一五七四年）ごろいキリシタンは神宮寺（天臺宗）を始め寺々とその佛像を焼きあるいは破壊し、全部を廢滅し去つた。純忠は更にその跡に教會、いわゆる南蠻寺を建て並べていつた。五年後の七年には長崎范木を、また彼と同様キリシタン大名たる有馬晴信は浦上をと、それぞれを寄進し、ヤソ會領としたのであつた。その後秀吉の禁教令が出され、天正十五年（一五八八年）には天領となつたが、その教勢は衰えることなく、度々の禁教も表面のみで、若干の消長はあつたが、南蠻の貿易とともに慶長十年前後を最盛期としていた。

◇そのころ密かに筑後の善導寺からヤソの町長崎に行脚してきた一佛僧があつた。彼が悟眞寺の開山上人の法蓮社聖譽玄故である。佛寺が一寺もないのに心を決し、再建を思いたつたが、この町にはたれ一人として耳を傾ける人はいなかつた。それのみか僧形で歩く彼には石ツブテの雨や竹ヤリを擬しての壓迫が續いた。彼は一應稻佐山の中腹なるフダン丘に難を避け、白晝は岩穴にこもり夜は里に下つて法を説き始めた。彼の眞意に何人かの里人が耳をかしはじめた。やがて彼の教化に身をていする必死の姿に里正（庄屋のこと）一徳も歸依した。日本二十聖人殉教の翌慶長三年（一九五八年）初めて稻佐山のフモトに草庵を結んだ。この場所は現在の寺地であり南北朝時代稻佐の長、地部たる伊奈佐氏の居城の跡。

◇この年一徳は聖譽上人を本山に上申、寺として正式な稱號「終南山光明院悟眞寺」を與えられた。この稱號は唐の善導大師の寺の名である。歸依した人々のなかには來港した唐人もまじつていた。そのうち二人の唐商、瀧州の人歐陽華宇と南京の人張吉泉は、他の唐人と相談して悟眞寺のダン家となつた。この二唐商が開墓居士である。現在もなお本尊前に聖譽上人のイハイと並んで供養されている。このため長崎系の華商は九州および國內の全部がここを墳墓の地とするのである。なお聖譽上人は寛永三年八月十日（一六二六年）七十五歳で没した。（筆者は悟眞寺住職）

譜 戀 想

泉 湛 田 鶴

—
清盛の弟で門脇中納言と呼ばれた教盛の第二子教經は、平家隨一の剛の者といはれていたがけあつて、若い頃から武藝の道のみを志していた。

この弟と異つて風雅に遊んで情操の豊かな兄の通盛は、詩歌の道に浮身を襄していた。

平家の世は今ぞと時めいていた安元の春のことである。

上西門院は、びんろら毛の車や網代車等車をつらねて北野へ花見の御幸があつた。

供奉の平家の公達の乗馬姿を、うらゝかな春の陽光が映へ照らししている。その中には、中宮の亮である通盛の姿も見受けられた。

法勝寺の櫻花は雲か霧かと思ふばかり、今を盛りと咲きみだれていた。香を薫きしめた美しい衣裳を着装つた上臈達の姿は、なまめかしく一層の興趣を添へている。妍を競う女群の中に、一きは目立つて繪からぬけ出たような目の覺めるように鮮かな麗はしい女性が公達の視線を浴びていた。通盛も、その麗はしい風にもしたはれそふな姿から眼をはなさず酔うたが如くちつと眺めていた。

彼女こそ、頭の刑部卿、範方の娘で、禁中第一のゆゝしき麗人と謳はれている小宰相であつた。國母に侍している數多い女房達の中にあつても、小宰相に越すものはないと噂されていた程の美貌であ

つた。芳紀まさに十六、美しい中に未だあどけなさがあり、まるで深山の奥で馥郁と咲く白百合を思はせる高貴さと優雅さがあつた。さすがの平家の公達も、目を瞬らされたのも道理であつた。

その日一日、通盛は花の興よりも、小宰相の美しさに、すつかり心をひかれ身も心も囚はれてしまつた。

屋形に歸つてからも、その日の匂うように、美しい小宰相の姿は通盛の胸から消すことが出来なくなつてしまつていた。彼は一人で胸を熱くたぐらせ、忘れようとすればするほど、楚々たる小宰相の面影は、胸深く刻み込まれて行くのであつた。

其の後、幾日も懊惱を重ねたあげく、どうしても妻に迎へたいと思ひつめた通盛は、纏綿たる情熱をつづつた手紙を認め歌を添へて小宰相の許に送つたのであつた。

優雅な平家の公達の玉章に接して悪い氣持はせなかつたであらうか、つゝしみ深い小宰相は、乙女心に羞恥を感じてか、返事を認めはしなかつた。

あの輝かしい眉、冷しいまなざしを思うと、堪へきれぬほど苦しくなつて戀の炎に掻きたてられた通盛は、其の後、熱烈な思慕の情を再三再四書き送つた。胸おどらせて返事を待ちこがれていたがいたずらに失望を深めるのみで、小宰相の手許に玉章が積るのみであつた。

「男心を知らぬ、餘りにつれない仕打ち」

彼は、骨を削り魂をそぐ思いして、果ては怨みがましくもなつて来るのであつた。剛毅な教經と異つて氣の弱い通盛は、小宰相戀しさに、まるで憑かれたように彼女の屋形の邊りをうろつき廻ることさへあつた。

が、彼女の心は固く殻を閉ざされて開かるべくもない。彼の戀心は無慙に踏みにじられた形だつた。

小宰相から、はかなくも冷かに看過されて失望と煩悶と懊惱とにぼんやりと喪心する日も多かつた。小宰相の無常に心に憤りさへ催して絶望と悲しみに、心は打ち碎かれて行くのであつた。

燃ゆるような情熱はいたづらに惱を沸らせるばかりで

(痴れ者よ)

と、自分で自分を強く罵つてみたい氣にとざされて行つた。

戀の浮虜から脱しよう、愛笛の二管に慰めを求めようとしたが笛の音も悲しい調べとなつて心をみだされ、作歌に耽らうとしても彼女の面影が險の裏に浮んで来るのであつた。

二

通盛は、小宰相の姿を胸の底に深く秘めつゝ、いつも心の中に抱きつゝ、早くも三年の月日が流れ去つてしまつた。

平家の公達であつた通盛にとつては、これまでは自分の欲した歡樂は思いのまゝ貪ることは出来た。この世に己の希望のまゝになら

ぬものはないとさへ思うほどであつた。

ところが、小宰相に對してのみは手も足も出ず、全く自己の無力に等しいことが痛感されるのであつた。戀いこがれるその人は近い所に起居しているのに、尙遠い氣がして一指も染めることさへ出来ないし、自分の存在さへ冷かに無視されているのではないか。自分の哀愁を慰める何物もない。片戀の煉獄に苦しんだ彼は、絶望の餘り自分で何かにぶつつけて五體を骨破微塵に打ち碎いてしまいたいほどの衝動にかられるのであつた。

三年の間に、小宰相の美は開花したように、一層の婉麗さを増して來ていた。そんな姿を眺めては、通盛は尙のことと思ひ切れない。今一度玉章を送つて最後の運命を試みようと思ひ切つた彼は、必死の熱情を傾けて、こま／＼と文をつゞつて「必ず小宰相に渡し奉れ」と舍人にいい含めた。

主人の意を受けた舍人は、直ぐ小宰相の許に趣いたが、相憎く不在ときいて侍女にも逢はずに空しく歸り來ようとした。折よく途上で御所に參る小宰相の見覚えのある網代車に行き逢つた。その舍人は小才が利いていたのか、車の側をつと走り通るようにして隙を伺つて車の物見から素早く手紙を投げ入れてどこかに姿を隠してしまつた。

ぼたりと、手紙らしいものが車の中に投げ込まれたのを眺めて、小宰相は一瞬美しい眉をひそめた。何者のいたづらであらう、と拾

つ上げて開いて見ると、見覚えある通盛の文字で、線々たる情を述べている小宰相のほゝは羞恥にほてつた。

讀み終つて捨て去ろうとしたが、こんな艶めかしい玉章を車の中に捨て置くこともならず、さればといつて大路へ投げ捨てるもいかになものと思はれ、思案の果て袴の腰に挟んでそのまゝ御前に伺候して、手紙のことなど忘れていた。

「かような珍らしきものを拾いました。持主は誰であらう」女院は玉章を示しながら微笑をもらされて訊かれ、じつと女房達の顔をみつめていられる。小宰相が御所で立ち働くうち落してしまつた手紙をそつと拾はれ、御衣の袂に忍ばせていられたものと見える。

「そのようなことは、神かけてさようなことは」女房達は身の潔白を表現しようとしてか、誰れも存じませぬと申し上げるのみであつた。

不覺にも手紙を落したことに氣付くと小宰相は、はつと狼狽して顔に紅葉を散らしてさしうつぶしてしまつた。

女院は玉章を開き給うと蘭麝の香もゆかしく匂うて手蹟も美しく「早く靡くより容易に靡き給はぬつれなき心強さが、却つて身にしてみて嬉しく思はれる」といつた意味が認めてあつて、その奥に、

我戀は、ほそ谷川のまろきばし

ふみかへされて　ぬるゝそでかな

の一首が書き添へてあつた。

「いかさまにも、これは返事あるべき事ぞ」

最初から通盛の手蹟と察しられ、二人の間のことをかねてから耳にはさまれていた女院は、通盛の心情を深く憐まれたのか、打ちつけた態度で御硯を引きよせられて、

たゞたのめ 細川谷のまる木ばし

ふみかへしては おちざらめやは

と、みづから返歌をあそばされたのであつた。

こゝに通盛と小宰相との間柄が、一切明るみに曝されてしまつた玉章が女院に拾はれて遇然が好運の架け橋となつて、女院の思召によつて小宰相は通盛に賜はることゝなつた。

通盛は、三年この方の苦悶も一時に晴れて、禁中第一の麗人を得て女院の取りなしに、うれし涙にむせんであらう。

初めて生き甲斐のある身の幸福を感じて通盛は、身も心も燃ゆるばかりの熱愛を、初妻に捧に捧げたのはいうまでもない、強いて慕情を壓へていた小宰相も、通盛に劣らぬ敬愛を捧げて夫に仕へ、二つの心は固く結ばれて、人も羨むような怨鴛もたゞならぬ新家庭に入つていた。

幸福のうま酒を酌み合つているこの睦しい夫婦の夢を、突如破つてしまうことが起つた。

それは、平家一門の都落ちという悲しい出来事であつた。

三

怒濤のように押しよせた木曾の軍勢五萬が、近江に充滿するとの報に、山科近江宇治橋へと向つた平家の軍勢は、いづれももろくも敗退して洛中に逃げ戻つて來た。

やがて叡山に據つた木曾の軍勢が今しも都へ亂入して來るという噂に驚いた街の人々は、家財道具を運びあわたとゞしく避難し初めた平家の衰運に憂色の濃い六波羅では一門の密議が行はれていた。

『もはや詮なきこと、この上は都を落ちる外には』

事態の急を告げる重い宗盛の言葉に、一門吐息をついて沈痛な面持である。

「矢一筋も酬いないで」

「こゝで滅亡の憂き目を見より再起を計ろうではござらぬか」

「都にふみ止つて最後の一兵まで戦はん」

しきりに強い説を吐く者もいて硬軟兩論に一座は騒いだ。

宗盛は、一族の長らしく際限のない議論を壓へて、

「これも一族が、こうなる運命と思ひあきらめて行かねばならぬところへ、何處までも行こうではござらぬか」

もうこれ以上住みなれた京に留まることの出来ない拙ない運命を心中に慨かぬものではない。

とりわけ通盛の顔には、狼狽したさまが歴然と現はれていた。

密議が終ると、平家一門の屋形では、どこも全く足元から鳥の立つような騒ぎであつた。

皆落ちる支度にいそがしかつた。

早くせねばならぬとせきたち、持つて行かねばならぬ品々の選擇に無中になつていた。行き先きの不自由さを思うと、あれもこれもと自然と大きな包となつて、澤山の荷物がうづ高く積まれた。

思いもよらぬ悲しい運命に、通盛は驚愕と錯雜した感に彼の心はかき亂されていた。

愛妻を都に留め置けば、又と會へるか會へないやらの不安があつた。さればといつて伴つて行けば、これから果しない漂泊の空で出逢はねばならぬ愛妻の辛苦を思うと、

(どうすればよいか)と迷はざるを得ない。その上、想起されるのは討死ということであつた。

通盛は妻への愛着と生への盲執に思い悩んだ。不安と焦燥の念にたまりかねた彼は、僅かの暇を作つてかねて聞法していた法然上人の吉水の庵を訪ねて苦衷を訴へたのであつた。

上人は、傷心した平家の公達に憐憫の涙を注がれながら、

「すべて世の中は移り變るものなれば、榮えによるこぶ時もあれば、又悲しみの兩山なすこともあります。いづれもさめればあとかたもなきもの。いかなる逆境に出逢うとも少しも心を苦しめ悲しまず、流れの水の流れるが如く、ともかくも素直に運命のまゝにまか

せ、あるがまゝにまかせて行けば妄念も斷ち切れます。心にとやかく思う妄執があなたを苦しめているのです。死ねば死ぬるまゝ生きたら生きるまでと打ちまかせて、何事も思い煩うことなく悠々と思食せ、くれぐれもこの心持を忘れ給うな。心にいたずらに無益のことを思はず如來の本領を信じて己の本分にひたすらつとめはげむのが念佛の心得でございます。されば軍の庭にあつても教經どのに劣らぬめでたきよき勳をたてられよ」

と懇切に、何事も如來の計らいにまかせ、素直に運命に従つて奮いたつこそ、あなたの生きる道と説き示されたのであつた。

悲運は悲運として、悲しみは悲しみとして靜かに運命の前に合掌するだけの心のゆとりを持つことが必要なのである。悲喜一如と観ずれば、自づと生きて行く力も湧いて来る。

上人の言葉は、通盛の狂はんばかりのいらたゞしい心をしづめさせた。

既に心の決した通盛は、雲の果て海の底までも一緒と、雨にうたれ風にふかれ軍馬の塵に埋れても共に生きんと、小宰相を伴うて都を後にした。

その頃、六波羅のところぐに火の手が擧つて、黒煙がもく／＼と空に靡き初めていた。

何というみぢめさであらう。これが曾て天下を我ものにして驕りたがふつた平家の姿であらうか。これが飛ぶ鳥を落とし、入る日を

まねいた權勢をはこつた清盛一族の運命であらうか。

様々な牛車や騎馬の武士から、赤い大旗小旗が混雜して續いてあつた。黄色い砂塵に包まれながら、行き先どうなることか、と不安と失望に胸とざれながら黙々と落ちて行つた。

四

一たん都を落ちた平家の陣所は、轉々として各地に移つた。通盛は見知らぬ天地で不安な陣中にあつても、夫婦互に慰め合い情愛至つてこまやかであつたので、絶望や悲歎に沈むことなく倦怠もなかつた。二人で生きる幸福に、いつも胸は喜びにあふれていた。二人の仲は人々に羨まれ、生死の明滅の中にあるお互の燃焼は、以前にいやまさるものがあつた。

やがて、平家は一の谷の城塞に立籠ることゝなつた。

生田の森は弟の能登守教經が引受け、山の手の防備には、通盛が當ることゝなつた。

坂東武者の烈しい進撃をこゝで食い止めるには、激戦はまぬがれぬと誰の目にも思はれた。

「明日は討死するかも知れぬせめてもう一度」

そう思つた通盛は、明泉寺の陣所へ小宰相を呼びよせて最後の名残りを惜んでいた。

流亡の中にあつても、小宰相の天性の佳麗さは少しも褪せていな

い。

小宰相は良人に秘めていた妊娠のことを、耳赤らめて告げた。

「わたしは、三十になるまで子供を恵まれずにいた。幸に男子であつてほしい。荒き波の上、舟中の住居である故さぞ不自由であらうが氣をつけてくれい。大切に生み落し、わしのかたみと思つて育てゝくれられよ。ゆめ短氣など抱くでない」

辛酸の垢の中にあつても愛情の幸は美しく咲いて慰め勵まし、互の物語はつきやうともしなかつた。

木曾討伐の北國の戦にも餘り戦に巧でなかつた通盛が、大切な陣地をいかに守つてゐるかゞ安ぜられ、布陣の模様はいかにも、馬を乗り廻して陣中見廻りをしてゐた教經は、兄の陣を訪れた。

來て見ればこの有様である。

陣中に女房を引き入れた兄の戀々たる態度に激怒を催したのか、陣やけた赤ら顔に尙朱に染めながら、クワツと目をいからせ、

「兄上、軍陣にありながら、これは何たる痴態でございますか。」

一門危急に瀕していることがおわかりになりませぬか。これでは山の手が守られましようや」

兄の女々しさに憎惡をいだいて、どなるように叱りつけた。

今度こそ、義經と雌雄を決せんと手ぐすね引いてゐる教經であつた。彼の荒々しい諫止もあながち無理ではない。

通盛は、ばつが惡そうに悔いの唇をかむのみで一言も拒辯しな

つた。

今は詮方なく通盛は、二三の兵に守らせて小宰相を女房達の乗つてゐる舟に送り届けさせた。

五

義経は、路なきひより越の嶮を越へ、虚を突いて一の谷を奇襲し、どつと武者吼立て、平家の陣へ攻め入つた。平家の軍兵は寝耳の水の驚きに、太刀よ弓よと慌てに慌て混亂してしまつた。

山の手の通盛の陣は早くもついえ、三千餘騎で固めていた猛將教經の生田の森の陣も火をかけられた。平家の軍兵は、猛火に攻められ、箭の雨を浴びせられ、坂東の鐵騎に蹴ちらされ烈しい太刀風に防ぎかねて崩れ立つと、舟に乘ろうとなだれを打つて渚に向つて敗走し初めた。追ひ襲う源氏の軍兵との戦がくりかへされ生田の森の海の汀には、平軍の屍が累々としていた。

哀れ忠度は戦死し、本三位中將重衡は、明石浦で生虜になつてしまつた。

通盛は、赤地錦の直垂、唐綾鉾の鎧着て白葦毛の馬に乗つて湊川へと落ちて行つた。

「あれこそ、平家の公達」

と、彼の姿を見て、兒玉覺の七騎ばかりが功を争つて駆け追つて來た。

まつ先きに駒を跳らして襲つて來たのは、もと平家の侍で小松大臣重盛に供へたことのある近江國の住人、佐々木庄の木村源三俊綱である。

襲うて來た敵が源三であると知ると、

「おのれ、下郎の源三め」

と馬首をもどした通盛は、太刀振りかざして源三と烈しく切り結んだ。勝負果てじと、やがて二人は馬を捨て、むんずと組み合つた。もろくも源三組み敷かれ、通盛馬乗りになつた。壓へ伏せられた源三跳ね返そうとしたが、石の如く強く抑へられ、びくとも動かない。通盛は素早く短刀で源三の喉元を目がけて、グサリと突きたてた。が、源三びくともしないで、するどくはね返さうとする。そのはづである。悲しいことに、武門の育でなかつた通盛は、餘程あわてたと見へて、鞘のまゝ突いたのである。

「南無三」

あわて、鞘を拂いのけようとあせつた瞬間、源三跳ね返して通盛を壓へつけると、忽ち首を掻いてしまつた。

六

一の谷が落ちたと知ると、御座船初めとし幾雙となく沖に漂うていた非戦闘員を乗せた舟は、或は葦屋の沖へ、須磨明石の浦へ避難し初め、或は大海原を揺れに揺られて遠く紀州路へ向つた。が、小

宰相を乗せた舟のみは、通盛の安否を氣づかうてか未だ沖に漂つていた。

折柄、通盛の郎黨見田時員は、あはたゞしく舟に漕ぎつけて來て通盛戦死の模様を告げた。

良人の討死ときいて、小宰相は驚きと悲しみに胸潰れる思いして顔を袖で掩うて泣き入るのみであつた。通盛との相戀の仲を思い、小宰相の悲嘆を推し量つて、女房達も誰ひとり袖を濡さぬものとはなない。

夢ではなからうか、小宰相はそう疑はれてならなかつた。深い悲嘆に沈みつゝも、これまで度々の戦にも無事であつたことを思うとほどなく生還されるのでなからうかと、はかない望を抱かずにはいられなかつた。

で、二日三日と待ちつゞけていたが、通盛は優しい姿を再び現わさなかつた。

やがて、一の谷を捨てゝ平家の全船團は、屋島へと向うことゝなつた。

今は頼の綱も切れ果て、良人の死と共に一切の希望と光明とを失つた小宰相は、餘りの悲しさに病者の如く床に伏せてしまつた。

彼女は淋しさに堪へかね、忘れられぬなつかしい良人の面影をしのんで追憶と物思いに沈んでは、深い溜息ばかり吐いていた。

或夜更けて、ひそかに床を脱け出た小宰相は、舟尾へとしのびや

かに歩をすゝめた。

舟は屋島へと向つていゝらしい。

四邊は寂として靜まり返つてゐる。月は冴へ渡つて水の面に干々と碎け、きこゆるものは舷によせる波の音、きしる櫓櫓の音ばかり。

打ち萎れてじつと海波を見つめてゐる小宰相の面は一層蒼白い。彼女は、新しくにじみ出て來る涙をぬぐつた。

人生を喜び分ちあつた良人は、もはやこの世にいない。良人なくしては一日も一刻も生きて行かない自分であることを初めて知つたのであつた。

永遠に歸り來ぬ良人に對する熱烈な思慕の中に光を見出した小宰相は、

「來世も夫婦、通盛どの一佛淨土の蓮の臺に導き給へ」と合掌して、忍び聲に念佛唱へつゝ、漫々たる海に身を沈めてしまつた。

後には、舟のかぶり火が、彼女の戀の終焉を弔う焚火のように、淨らかに靜かに焚へつゞけていた。(完)

x

x

x

x

祖 || 法 || 然 || 上 || 人 || の || 歌

— 第三回 —



澤 || 田 || 岳 || 潤 ||

月影の歌

法然上人の歌で人口に膾炙されているは

月影の至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ

との歌であります。

この歌は浄土宗々歌と定められ新千載勅撰和歌集に入撰された秀歌であることは前述しました。

由來、この月影の歌に就ては、いまゝで多く字義の解釋や註解が

あり法然上人行狀畫圖翼贊を初め湛澄上人の空華和歌集最近に就ては安西覺靜師の法然上人の歌などの著作に、それ〴〵の解釋がありことに月影の歌に就ては懇切に歌意の講義や字義の解釋がある事とて、こゝに獨自の研究も創見もないもの、説明を必甲としないのですが蟹は甲羅に似た穴を堀ると言はれる如く、さゝやかな月影の歌に關して鑽仰せんと思うのみであります。

古來、詩歌人の月を題材としたものは非常に多く専門の歌人でない法然上人も寡作家でおはしたので月を主意としての創作はこの月影の歌一首のみであります。

上人の歌は、いづれの歌を拜しても一讀平明、直裁簡明で少しも

澁滞なく、すら／＼と一本調子に技巧も無理なく修辭も新鮮で歌意に餘韻が溢れています。この月影の歌に就いては、その感銘が更に深く感ぜられるのであります。

この月影の歌の詞書には照益の文である光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の心をとあつて創作の時も所も記録されていませんが、その歌意から考へて小松谷の草庵にあつて月を眺められた折の感懐であると想像せられます。

その時、法然上人は七十餘歳の老齡で小松谷の草庵に於て、さやけき月の美感に詩情を動かれて、この月影の歌を詠まれたものであると思えます。

くまもなく照る月光のさやけさも頭を垂れて月を見ぬ人には何の感想も詩情も自然美も心に感銘を與へられぬとの歌意であります。

こゝに法然上人が淨土教の開宗者として、また念佛信仰の體驗者としての眞意が、この歌を徹して、しみ／＼と感得せられるのであります。

宗教の門は「叩けば開かる」「求めば與へられる」というのが原則的通念であつて「眺むる人の心にぞすむ」と法然上人は、これを念佛衆生と撰擇の心意を表現せられたのが月影の歌の内意であると思はれます。

もつとも上人は歌をあまりに詠まれなく教化の資として創作されなかつたらしい事は前にも述べました。若し教化の具として歌を創

化される意志があつたら、ゆたかな詩情と天才的素質の所有者でおはしたから、もつと多數の歌を創作されたに違いないと考へられま

す。道元禪師が賴朝公の請によつて禪の歌を詠まれた、また時宗の一遍上人が多數の歌を創作された、それは一遍上人が行雲流れの自然を友として遊行の日が多くあつたと共に教化の資として歌を多く創作されましたが、そうした關心は法然上人には稀であつたようです。

法然上人の生活、それは信仰そのものであり、法悦の溢れ喜びの行としての念佛一行の生活であつたから、ゆたかな天成詩人として詩情を奥深くたゞえておはしたが悠々と歌作に熱注せる事を欲したまはなかつたのではないかと思はれます。

そうした意味からも月影の歌は主觀は念佛生活で、いはゆる「念佛以外のものは無で」あるのですから、その點を深く強調されたものと拜せられます。

かく上人の月影の歌には、まことに圓融無な性情と共に他面に於ては秋霜烈日の強い意志が潜まれています。

まつたく法然上人その人を身近に感じ、その息吹をさへ、この月影の歌を拜するとひとしおに伺はれるのであります。

また法然上人の歌は、この月影の歌といはず上人獨自な歌ともいふべく、萬葉の素朴もなく新古今の艶麗もなく、また歌量の僅かな

寡作家でおはしたから、その歌の特調とか修辭の配列とか他の歌人と比して特に異なつた點は見いだしがたいのですが法然上人獨自な法然語といへば言うこともできます。

この月影の歌のほか上人の歌全體に就て、いろ／＼と鑽仰の日もある事と思ひ、こゝでは法然上人の歌に就ての概論とも見るべき小考に禿筆を呵して、たゞ上人その人の歌の功德を拜したまでであります。

むすび

祖法然上人の歌に就て、さゝやかな鑽仰の筆を進めて來ました。

その中で上人の歌に對する態度、歌作時の御年時、勅撰和歌集の關係、代表的秀作である月影の歌に就て、まづしい小考に禿筆を呵しました。

前來より、たび／＼記述した如く法然上人は世にいう専門の歌人でなく又その歌數も、乏しい事として「歌人法然上人として」の資料は少なく、いきおい内容も淺薄なものです。が上人報恩謝德の一端としての目論見に過ぎないのであります。

もつとも法然上人の歌に就ての深い考察、史的研究、たとへば上人以前に於る歌の思想、内容、淨土開宗されし法然上人以後の思想淨土往生念佛信仰の點など精細に検討すれば、そかに必ず或る思想の變化新しいものが認められるに相違ないと思はれます。

それらの點も考察したいと思つていますが、何といつても學乏しく識淺きを慨ちつゝある現状です。

また上人と高渉深き兼實公、その父子を初め慈珍など當時の有名な歌人であつたから法然上人歌作の上に影響を與へられたと思はれます、上人自らは「歌を讀むとか作る」とか自發的の歌心は無かつた如くあるも、當時の文化人としての交遊の間には自然に歌道に關する事もあつたらうと伺はれます。

ことに慈珍は法然上人配流後に、その住宅を提供されしほどの間柄であつたから慈珍の歌の内容を伺がえ、ひそかに法然上人の信仰思想もふくまれていると思はれます。

これと共に法然上人と同時代の高僧大德の歌とも比較検討すればさらに上人の歌の獨自の面が伺はれるものと考へられます。

そのほか上人の歌に就て考察を深めてゆけば、いまだ世に表現されない、いろ／＼のものが深く含まれている事が想像せられますがそれらの點は後日を待ちて鑽仰を進めたい所存です。

今は唯、つねに抱いてゐる祖法然上人の歌に對して、まづしい、さゝやかな、この小稿を起して祖恩謝德の微志とし、また近く迎へんとする祖上人七百五十年御恩忌の心構へのあらはれとして記述したに過ぎません。

かね／＼「何事も念佛の助業」との上人の御消息に感銘しつゝある私は、この小篇も念佛の助業としての執筆と感じて一文を草したのに過ぎないのであります。

なほ祖法然上人の歌に就て識者の啓蒙と指針を乞う次第であります。



佛身論

佐藤密雄

（一）法身佛

奈良の大佛は「びるしやな佛」と申上げる。眞言宗で大日如來と申す佛と同一であるが、この佛は全體としての大宇宙界を佛身とされる佛である。天地の間の一切の音は、人の聲も物のひびきもすべて此の佛の音聲であるし、萬物の動きは、四季の運行も人の働きも機械の動きもすべて此の佛の所作であるし、一切の意欲の働きは、犬猫の怒りも幼兒の喜びも大學者の思考もすべて此の佛の精神活動であると言ふのである。

此様な佛を法身佛（ほつしんぶつ）と名づける佛敎の根本となる道理實體とも見るべき佛であつて、理の佛とも呼

ぶ。此の理の佛である法身佛を基盤とし實體として、其上に凡人が迷いを轉じて佛となる現象があり、報身佛と言われる智慧と慈悲の圓滿な佛が凡人を導く佛相を現じ給うし又應身佛と言はれる佛が、人畜等萬差の有情（うじよう）に同じて佛道を説く事業が見られるのである。

奈良の大佛を拜見すると、大佛蓮臺の花弁の一々に夫々一釋迦佛が出現して民衆に説法する一佛敎世界が彫刻しあてゐるが、經典に依ると、此の一々の花弁の中の釋迦佛の蓮臺の花弁の一々にも亦夫々一釋迦佛が出現して佛敎を説く一佛敎世界であり、更にその釋迦佛の蓮臺の花弁の一々にも同様であつて、此様にして重々無盡に世界があつてそのすべてに一釋迦佛が出現して佛敎を説く佛の作業があると

せられて居る。

此のことは「一びるしやな佛」の佛の世界には重々無盡の佛界があり夫々佛教作業が行はれて居るとすることによるのであるが、その全體が一びるしやな佛に統一維持される作業であるとせられる。此のことは、此の大宇宙が一全體としてびるしやな法身佛であり、此の大宇宙の重々無盡の現象はすべて法身佛の現する佛事であると見るものである。恐らく此様な意味の奈良の大佛を建立された聖武天皇の理想は、日本國をば一大佛教世界とし、奈良を中心とした「びるしやな佛」の淨土たらしめようと考へられた結果であつたと思はれる。

(二) 報身佛

次に淨土宗や眞宗の寺々又は信者の家庭の佛壇にある本尊の阿彌陀如來の様な佛は報身佛と名づける。上に述べた法身佛を理の佛とすれば此は理が完全圓滿に具體化した事相の佛である。法身佛は、此を象徴して奈良の大佛の如く造形するが、此は人が象形したので、本來は色も形もなく従つてすべての色や形あるものゝ道理として全體を維持統一する佛である。此に對して報身佛は、其の理が理想的な完全な状態に現象した佛である。例へば三十二相の超人相を具へるとせられる阿彌陀如來の如きである。

阿彌陀如來は佛智と慈悲を完全する佛である。人々を化

導して佛となさしめる爲め方法を完全に所有した佛である。其の身には超人的な三十二の特相を具へて、人を導くにも法を説くにも缺くる所がない。阿彌陀如來が居給う所は、その居給うことに依つて、惡と迷いのない、たゞ悟りへの導きだけが具はつて居る淨土である。すべてのものは此の佛を念ずることに依つて、此佛の下に、此の淨土で佛となることが出来る。

報身佛は又、佛道を行じて佛とならんとするものの理想である。阿彌陀如來の前身は國王で、出家して法藏比丘となつて菩提心を發した。菩提心は文字通りには眞理を悟ることとて、法身佛の世界理を悟得することであるが、然し大乘佛教では此の様な菩提心を具體的に見れば他の迷いを救はんとする大慈心を生ずることとする。大悲とは自身存在を考へずしてひたすら一切衆生の悟りとその生死の解脱の爲めにのみつくさんとする心である。そして此の發菩提心は大乘佛教に於いては、佛道の出發點なのである。法藏比丘は菩提心を發して世自在王佛の御前で自身が一切の人々の成佛する爲めの道場、即ち淨土たらんと志願したのである。そして此の志願を満足する爲に長い行修をなし、ついに此を完成して阿彌陀如來となつたとせられる。即ち佛となるのは佛位を得るのでなく、一切衆生を救う爲めの、法身佛の理を理想的な救い事業として自身に現はすことである。阿彌陀如來は自らの菩提心に依つて志願

してその結果その志願を現成する報身佛となつたのである。報身佛の報とは因果の果の意味である。菩提心の志願と行修を因としてその結果その志願するものを完成する能力を得た佛である。此を自受用報身と言うのである。種々な能力等を完全に自身に受けて利用し給う佛である。然し其等の能力は他のため、即ち一切衆生を化導し救さいする爲のものである。だから自受用は他受用のものである。他人が受用すると意味を他受用と言うのであるが自受用報身はそのまゝ他受用報身と言うのである。報身佛に、自受用と他受用と二つの名はあるが、決して二身別々にあるのではなく自受用は他受用で一體であると見るべきものである。

(三) 應身佛

歴史上に實在した釋尊の様な佛を應身佛又は應化身と名づける。報身佛はあるべき理想身であり理としての法身の完全な具現とも言うべきものであるが、此の應化身は、法身佛の萬化の働き振りととも、報身佛のより具體化した救済の實際像とも言うべきものである。法身佛が衆生を愛する故に、その衆生の生死の苦を解脱せしめる爲めに相手に即應して、犬には犬の姿で、人には人の姿で現はれて、犬の生活や人の生活をしつゝ教へる佛である。

釋尊は人間が佛となる事實を示す爲めにカピラ城主の子

に生れ、菩提樹の下で成道して佛となり給うたのである。又人間の生死解脱は此肉體が石や金となつて死ななくなるものと誤解するものを警覺する爲めに八十歳にして老病死の事實を示されたのであつて、此は應身佛として人間に應同して現はれた佛である。

天台宗や日蓮宗では印度で菩提樹の下で成道された釋尊を通じて久遠實成の本佛（法身佛）を認めて居る。此に依ると、釋尊は永遠の昔から成道し給うた法身佛であつて、此の佛が人間化導の爲めに、假りに印度で出家・成道・八十歳死去の相を現じ示されたものとするのである。

(四) 三身佛の成立

以上の様に佛身に法身佛と報身佛と應身佛の三身を立てるが、既に述べた所から明らかな様に、法身佛とはいはゞ形而上の原理であつて、此は佛と言うよりは佛教の悟りや修行が可能になる原理であるとも見られる。釋尊の死去された時に釋尊の遺誡となつたものは二灯の教訓であつた。

二灯の教訓とは「法に依れ、汝自身に依れ、他に依る勿れ」と言う教へである。此を解釋して言へば、「君達は何者にもたよつてはならない。君達めいめいの良識に依つて眞理にたよるべきである。眞理とは我が生涯に説いた教説であると言う意味になる。このような遺誡があつたので、釋尊の死去後の佛教には教主と言うものがなく、釋尊の教

説だけが不滅の眞理として奉ぜられたのである。此時から全佛教を維持統一するものは人でなく眞理であることゝなつた。此は佛教を理解する爲めの重大な鍵であるが、此時以來、佛教の依るべきは教法であり、我等の大師たる佛身は眞理であるとせられたのである。そして此の教法を不滅の佛身とする考へを教法法身の説と言うのである。

教法法身とは、教理を佛とすることであるが、教理は世界の道理であつてまたすべてのものを全體として一つのものに統一維持する眞理である。そしてこれが又佛教の實體である。此の様な意味が積極化されて法報應三身の法身佛の成立となつたのである。そして、此の法身佛が、佛道修行上に人格的な信仰の對象の要求に即應した時に理想と現はれる姿の報身佛が成立したのである。だから、法身佛は我々が佛教を考へる時の根據となる佛であるが報身佛は佛教信じ行ふ時の仰ぎ信ずる佛である。信心修行の加護や導きをお願いする佛である。そして第三の應身佛は釋尊の如く佛教を信ぜざるものゝ中へ佛教の光と救いを施さんとして、積極的に民衆社會の中に俱に生き働く佛である。誤樂の友が佛教を説き聞かせて呉れる時、私共はその友に應身佛の化導の姿を見ねばならないのである。(大正大學教授)

.....x.....

佛教でいう悟りとは

平氣で死ぬことではなしに

平氣で生きることだと悟つた

正岡子規

「いやだ」とハッキリ拒絶した時の

快心噓うるものなし

この一聲を放ち得ざるところに

人事の禍根がある

涙 骨

凡そ人間の一大事は

今日の心なり

今日おろそかにして

明日あることなし

なべての人

遠きことを思いて

計ることあれども

面的^{てきめん}の至るところを知らず

倭論語

御歌

阿彌陀佛と

申すばかりを

つとめにて

浄土の莊嚴

みるどうれしき

目次

卷頭言	1
法然上人に對する日蓮聖人の態度	須藤隆仙 2
ゆうれいの出るわけ	竹中信常 5
大文字	藤木隨教 9
ルネ夏期僧堂	11
たあちやんとヤギ	北村謙順 12
自坊自讃——長崎悟眞寺	木津義彰 17
小説想戀譜	鶴田湛泉 18
祖法然上人の歌(三)	澤田岳潤 26
佛教入門(その八)	佐藤密雄 29

豫 告

淨 土 九 月 號

——日常勤行式特集號——

卷 頭 言

現代勤行式について

香 燭

三 寶 禮

四 奉 請

歎 佛 偈

略 懺 悔 文

開 經 偈

念佛と回向

法 語

四 弘 誓 願

三 身 禮

送 佛 偈

三 尊 禮

讀經の意義

法式解説

佛教入門

○臨時御注文は部數に限りがございますのでなるべくお早
く願います。

中 村 康 隆

渡 邊 眞 海

佐 藤 良 智

藤 井 實 應

藤 木 隨 教

福 富 海 岳

谷 部 譚 雄

中 野 隆 元

小 澤 勇 貴

佐 藤 賢 順

佐 藤 密 雄

戸 松 啓 眞

眞 野 龍 海

吉 水 大 信

松 瀧 誠 康

八 百 谷 孝 保

佐 藤 密 雄

後 記

○八月七日の立秋を境にして暑さも峠を越すことに暦の上ではなつておりますが、現實には、そうは問屋がよろしません。

○本誌の諸先生も夏休み、それで先生方の消息をちよつと、或る雜誌の社中日記を似るわけではありませんが。

○御大佐藤密雄先生、河出書房の經典シリーズの一つ「無量壽經」を御執筆中、いささか原稿ノイロ一ゼ氣味。佐藤賢順先生、御勉強の爲伊東の方へ。佐藤良智先生、暑い中、毎日教師養成講座に御出講中。

○竹中先生、講演をかねて箱根の方へ、又御家族づれで信州へと。僚友宮林君、長野の二寺の住職、お盆に加へて、二十二日は、淨土の講演會を開くので行きつきり。

○以上の様な次第、と云うと本誌は小生一人で背負っている様ですが決して左にあらず。

○次號は上の豫告の通り日常勤行式特集號です。渡邊宗務長初め諸先生の玉稿も全部揃い誠意編輯中です。(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨 土」 八 月 號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三十一年七月廿五日印刷
昭和三十一年八月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹 中 信 常

發行人 佐 藤 密 雄

印刷人 春 山 治 部 左 衛 門

東京都千代田區神田保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人續仰會

電話 東京 八二一八七番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇
區役所前
正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

御袈裟法衣御調進

- 錦金襴
- 特種織物
- 御水引
- 御打敷
- 御幡
- 稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新裝の稚兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺
宗務所
大正大學
芝中高校
淑徳學園
御用達

東京都港區西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
トで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付